

---

# プラネタリウム ~懐かしい匂い、風の心~

平澤 生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プラネタリウム～懐かしい匂い、風の心～

### 【Zコード】

Z3934B

### 【作者名】

平澤 生

### 【あらすじ】

幼馴染とすこした懐かしい日々。先輩とすこしことにいつ時。どつちが大切なんだろう

時間つていうものはいつもそ知らぬ顔をして流れていってしまつもので、俺がもつと長い時間を過ごしたいと思つていた中学時代はあつという間に過ぎ去つてしまつた。気がつけば真新しい制服を着て、電車に乗つて学校に通つていた。中学校には毎朝、自転車で田舎周りが田んぼばかりの道を通つていた俺にとって、電車に乗つて登校するということは自分が高校生になつたことを一番意識させた。

毎朝の電車は馬鹿みたいに混んでいる。何十両も連なつた箱の全てに隙間なく詰め込められた人間はどれをとっても同じ方向に行きたい人で、どれをとっても遅刻ぎりぎりの常に焦つている人だ。だれもがせかせかとしている朝。初めはうんざりだった。

もつと早く起きろよ。

一、二日連続で同じ車両のそれも同じ位置に乗つてきた揺れるたびに寄りかかつてくる太つたサラリーマンと音漏れの激しい、Tシャツを着た男に俺はそう言いたくなつた。

しかし、心で言つてみた後に自分だつて遅刻ぎりぎりの時間帯で来ていることに気がついた。

学校まで一時間。朝の五時起きは慣れるまでに相当の時間を要した。

そんなことがあつてから俺は電車がいくら混もつとなんとも思わなくなつた。登校。出勤。帰宅。外出。いづれにしろ、この箱いっぱいに乗りやるを得ない理由が溢れていることに気づいたのだ。

そんなぎゅうぎゅうの電車に俺は今日もまた乗り込んだ。がたがた、と壊れそうに心配になるいつもの音をたてて、電車は出発した。また、なんでもない一日が幕を開ける。

溜め息は口の中で飲み込んでおいた。

俺の学校には俺とおんなじ中学校だった人は一人もいない。中学を卒業したら大半はばらばらになってしまった。それぞれが卒業前に自分の目標を掲げて、必死に勉強をして高校に入つていった。そして納得いく進路に進めた人も納得いかずに終わってしまった人も、結局はそれぞれの道を進み始めた。

ふと、一人の顔が思い浮かんだ。

「わたしはね、えっと、この学校いきたいんだ…」

おんなんじ塾に通っていたそいつはそうやつて恥ずかしがりながら高校の案内を見せてくれた。触り心地のよい紙でできたそれは俺の中学から一番近い学校のものだった。

「いけんのか？」

「…頑張る」

「頑張れよ」

そんな会話をした半年後、そいつは見事にその学校に合格した。段々とそいつに関する記憶が新鮮になつていくにつれて、俺はあることを思い出してメールをしようと携帯電話を取り出した。

「次に会うの週末の夜八時でいい？」

そう送信すると、さつき飲み込んだ溜め息が体内で消えた気がした。

時間というものはいつだつて知らない顔をして流れていってしまうもので、わたしがもつともつと思い出を作りたかった中学時代はあまりに早く終わってしまった。気がついたら買ってもらつたばかり当たり前だけど新しい制服を着て新しい学校に登校していく

た。変わったないのは自分の身長と、それから週に一回は幼馴染の古池葵に会うということだけだった。葵のほうが頭がいいから、わたくしたちはおんなじ学校を受験しなかった。だから会えるのはその日だけだ。

高校についても定期的に会うと決めたのは、卒業式の日のことだった。涙もろいわたしはそのまま、完全に前が見えなくなるほどの涙のせいでの殆んどみんなの顔を見た記憶が無かつた。ただ、二期の初めの頃から決めていたクラスの打ち上げに参加してずっとずっと泣いてたというのがその日の記憶の殆んどだった。

だけど、それよりもはっきりしている記憶がたつた一つだけだったしの頭に未だに埃を被らずに残っている。

「お前ひ、ちよつと泣きすぎじゃないの？」

その記憶の始まりは男の子の中では少し高い、葵の声だった。わたしあはぐすん、と一度咽んでから顔を上げると葵の影が日に映る。最近またちょっと背が伸びたんじゃないかな、と思つていると影はわたしの隣に座った。

「だつてさ、だつてや…みんなと今日でお別れなんだよ? 葵とも今

田で会えなくなるんだよ?寂しいじゃんか…」

わたしはめそめそと泣く子どものように、力なく言った。涙は拭つてもまた流れてくる。

「おいおい。別に、死んじゃうわけじゃないだり…。家に行きや会えるつての」

葵は必死に問い合わせたわたしにつるたえずにつ、笑つて答えた。そして答えてから、何かに呆れたときのから乾いた笑い声を小さく上げた。

「もー。泣き止めよ。…つたくしょ「がねえやつだなあ

それでも泣き止むことができなかつたわたしに今度はめんどくさいときの声でそう漏らした。だけど、わたしはむしろそうやって葵が呆れたり飽きたりする度に泣けてきた。この声だって聞こえなくなつちゃうんだらうな、と考えてた。

「じゃあ、こいつようぜ？月に一回か二回くらいはお前ん家に行つてやるよ、な。それで、いい？……つておい、泣き止めて」なぜだかわからないけれど、そう言われた瞬間に涙がぴたつと止まつた。わたしは「ごじ」と残りの涙を袖で拭つて葵のほうを見た。その日初めてのはつきりとした葵の顔だった。いつも通りの少し間の抜けた葵がわたしを見てた。

「うわ、お前目がすげえ赤い」

葵はじつと見つめてからそう言って吹き出した。それからどんどんだけ泣いたんだよ、つてお腹を抱えた。

「わたしは葵より纖細にできてるんだよー。」  
わたしは今度は顔を真つ赤にしてそう言つた。

「わかったよ。ほら、目薬使え」

少し大きな声をだしただけで退いたやけに素直な葵と、目薬を手渡してくれたやけに優しい葵のせいで涙がまたしても流れそうになつたけれど、何とか我慢してわたしは目薬を注した。

「うわ、また泣いてるよー」

目を何度もぱちぱちさせると、瞳から流れ落ちた目薬を指して葵が嬉しそうに言つた。

「これは目薬でしょ、バカ」

そう言つたわたしの目からは本当に涙がちよつと流れていた。

朝の登校中。ふと携帯電話を見ると、メールの着信をお知らせするランプがピカピカと忙しく青に点灯していた。

わたしはこの色が好きだ。綺麗だし、それを見るたびに誰からメールだらうとわくわくするからだ。

メールはやっぱり葵からだつた。こんな時間帯にメールを送つてくるのは葵くらいしかいないから、なんとなくわかつてた。

「次に会つの週末の夜八時でいい？」

「了解ッ」

わたしはその後に顔文字をつけてそう返信した。

やせぱぱつ、時の経つのは驚くほど早い。ちよつと休憩、と腰を下ろやうとした矢先にはもう週末を迎えていた。今夜の夜八時に俺は安田葉摘に会いに行く。

幼馴染の安田は、考えてみればいつも俺の傍にいた。小学生のときお母さんに命ぜられた安田。そのときまだちやんと呼んでいた。は毎朝俺の家へやつて来た。

「あーおーいー。遅刻しちゃうよー」

俺はたいていの朝をその声で起きていた。俺の両親は仕事が朝早くからあるため、起こしてくれる人が家にはいなかつたのだ。目覚ましは機械的過ぎて少し鳴つていると耳に馴染んでしまう。そんなときの安田の馬鹿でかい大声は今思つと相当効いた。ぱちつと急に田が覚めて俺は反射的に着替えてラングセルを手にして階段を駆け下りる。そして朝ごはんに用意されているパンを手にとつて、玄関へ向かう。

「遅いよお。もう遅刻しちゃうよー」

ぶーっと膨れてくる安田をよそに慌てて靴をはいて外へ飛び出す。

安田は俺の母に渡されている俺の家の鍵で家に施錠をしてから俺をばたばたと追いかける。

学校までの道はそう遠くない。俺は慌ててパンを食べて、安田と一緒に学校まで全力疾走した。

時間が経つことにどんどんその距離は短く感じるよつになつて、小学校も終わりに近づくと歩いても遅刻しないくらいになつていた。身体が成長した証だ。こいつの間にか俺は安田よりも身長が大きくな

つていた。

そうやつて俺たちはいつでも成長を共にしていた。

だから、卒業式の日に泣いていた安田の気持ちは痛いほどにわかつっていた。いつでも一緒にいたやつが、これからはいなくなってしまう。友達もそうだし、もちろん安田も。やっぱり本当のところ不安ばかりだつた。ただ、安田が泣いている傍で自分が泣いたらどうなるかがなんとなくわかつていてのでぐつと堪えて強がつた。強がつて笑つて何とかごまかしていた。

こいつの前では笑つてなきやな。

それはもしかしたら頼れる兄が妹の前で涙を見せないとおんなじ様な心理なのかもしれない。

もしものときの言い訳用に日薬を持っていた自分は今となつては少し笑えてくる。きっとそんな話をしたら、安田はまたあはは、と小さい口をいっぱいに開けて笑うだろつ。それから最後にこう付け足す。

「葵、ありがと」

たぶん、俺の目を一切見ないでぶつきりぱう。そして俺も笑う。学校や電車よりも幾分と居心地のいい空氣はそうやって出来上がつていいく。

今日もきつとねうだ。俺と安田は夜の闇にもそんな空氣を作り出して笑いあう。なんでもない話。材料はそれだけだ。時計を見てみると時刻は既に八時ちょうど。俺は慌てて服を着替えて安田に再びメールを打つた。

「今から、行く」

それだけの文字を送り終えると俺は安田家へ向かった。

今夜は葵が家にくる約束になっていた。

「月に一、二回お前ん家に行つてやる」

そう言った葵は一学期の半ばのこの頃は一週間に一回くらいのペースで会いに来てくれる。最初は一人とも、身長が伸びたとか、ちょっと痩せたとか言い合つてたけど最近はそんなことも言わなくなつた。

「うん。変わつてねえな」

代わりにそう小さく頷く。人間、一週間じゃそんなに変われないものだな、と思った。葵も大きくも小さくなつてない、いつものままだつた。

今日もきつとそう言つてから靴を脱ぐんだろう。わたしは玄関を見て、微笑んだ。

昔、葵はよくあそこで躊躇つてたつけな。  
ふと昔の記憶が甦つてきた。

「葵君、大丈夫？」

玄関で大きな音がしたかと思つとお母さんの慌てた声が聞こえてきた。わたしはばたばたと玄関まで走る。するとそこにはぶつけた膝を優しく撫でるお母さんと葵がいた。表情からして結構強くぶつけたみたいだった。しかし、葵はわたしの顔を見るなり無理に笑つてみせて、全然平氣だよ、とすくっと立ち上がつた。よろけながらもわたしのところへくるから、わたしはそのまま怪我したほうの手を握つて居間のソファーまで連れて行つてあげた。

「今、ジュース持つてきてあげるわね」

その当時、家には葵の為だけのパックのグレープジュースが置いてあつた。葵のお気に入りで、家ではいつだつてそれを飲んでいた。ジュースを持ってきてもらつた葵はもうすっかり足の痛みのことなんて忘れて笑つていた。

「ほら、早く行こう」

大きなゴップ お父さんとの同じ大きさだ で一杯のジュースを飲

み干してからこいつもそつやつてわたしの手を引っ張つて外に連れ出した。今思うと葵はすく単純なやつだ。

「今から、行く」

葵からのメールが届くと、時刻は既に八時を回つてることに気がついた。わたしは慌てて今から自分の部屋に戻つてみる。机の上もベッドの上も女の子の部屋か疑つてしまつ賑わいだつた。

「…今日はリビングにしよう」「ひう

わたしはそう決めて一人で頷くと、玄関のチャイムが鳴つた。

「あら、葵君。ハツなら今部屋にいったみたいよ」

お母さんの声がわたしの部屋まで聞こえてきた。葵はたぶん、それを聞いて階段を上つてきた。一歩ずつ、階段を上る音が聞こえてくる。わたしは慌てて部屋の外にでて、部屋のドアをばたんと閉めた。

「…あ、葵。今日はリビングで話そう

わたしはまるで部屋でこつそりと誰かをかくまつてるかのよつて流れて、ドアから葵を遠ざけた。

「うん。オッケー」

幸い葵はぐるりと回れ右をして階段を駆け下りた。わたしも後ろからそれについていく。

「あ、おばさん。」れ、「さうぞ」

先に居間に入つた葵がお母さんに紙パックのグレープジュースを渡した。葵はいつまで経つてもあの味を忘れられないらしい。

「ねえ、葵。覚えてる?」

わたしはソファーにどかっと座つてそんなことを聞いた。

「何を?」

葵は氷でひんやりと冷えているグレープジュースの入つたコップを一つ渡して聞き返した。わたしはむきゅ、と小さく言つてから答える。

「よくさ、うちの玄関で扱けて、」ジージュース飲んだこと

「…変わつてねえな」

葵は家に入ったときに言えなかつたからか、突然そんなことを言つた。そして、黙りこくつたわたしに続けた。

「お前、そつやつて人の忘れない過去をすばすばとー…。変わつてねえよ」

葵はそう文句を言つと、一気にジュースを飲み干した。

「よし、早く行こつ」

そして葵はそんなことを言い出した。全く変わってないほうはまるつきり葵のほうだよ、と文句を心の中言いながらも手を引かれて外にでた。

七月の夜は雲がなくて星がいくつも見えた。

5

安田と一緒に外にでたことに特に意味はなかつた。ただ、なんとなくグレープジュースを飲んだら空の下に出たい氣がした。

「俺さ、はつきり覚えてる」

俺は星を見上げてそう、呟くように言つた。目には既に人工物はいつも映つていなく、まるで宇宙にいるみたいだつた。

「あの星の名前？」

安田はたぶん、わざとそんなことを言つて楽しそうに笑つた。

「違つて。よく玄関でこけたときのこと」

「ああそつちか。わたしさ、ずっと葵の手握つててあげたよね？」

安田が手を高く天頂にかざしてみせた。俺は久しづりにちゃんと見る安田の手は小さい頃から変わつてないことに気がついた。

安田は小さい頃から、俺が怪我をするとなんでかはよくわからなかつたが怪我をしたほうの手をぎゅっと握ってくれた。それが玄関でこけて膝を打つたとしても何故か手を握つていた。だけど子ども

の頃はそれがなんとなく安心できて少し嬉しかった。

そういえば、一度だけ中学のときにも安田が手を握つてくれたときがあった。中学のときに陸上部に入っていた俺は高飛びのミスで足に大きな怪我をしてしまったときがあった。そんなときに入院先に真っ先に来てくれたのが安田だった。安田は走つてきらしく大きく肩で息をしながら俺の足を確認して、包帯が巻かれている左のほうの手をとつてぎゅっと握つてくれた。走つてきたとはいえるまだ一月下旬だったそのときの安田の手は驚くように冷たかつたけど、その中にも暖かさが会つた気がした。

「うめんね。こうしてたら楽になるよね」

安田は退院までずっと学校のとき以外を俺の病室で過ごしてくれた。一生懸命な安田を見たら幼馴染つてやつぱりいいな、と思つた。

「手が邪魔で星が見えない！」

俺はかざした手をどこで、またその遙か先に浮かんでいる星に手をやつた。

「ちょっとー邪魔つてひどいなあ」

そう、顔を膨らまして言つ安田はやつぱり何も変わっていなかつた。ただ、変わらないからこそとっても落ち着ける居心地の良い空気が漂つていた。

息がちょっと苦しくなるくらいに頭を上に向けて星を眺めていると、視界にはわたしの家も周りの家もそれから葵も見えなくなつて、まるで宇宙にいるようだつた。

「ねえ、知つてる？あの星、アンタレスとか言つんだよ

わたしは真っ赤に輝く星を指差して言った。中学のときに理科が好きだったわたしは星に詳しい。これだけは葵よりも得意だと言える。

「ふうん。よくわかるなー」

「簡単だよ。あの星はさ、たそりの心臓なんだ。それでね、その両隣が 星と 星のアル・ニヤトって星なんだ」

わたしは記憶の通りにそう言つて、葵が首をかしげた。

「…よくわからない。どれも同じに見えるけど?」

葵はつまらない顔をして言う。葵は自分の話はよく人に聞かせるくせに人の話を全然聞いてくれないのだ。わたしはなんとなく悔しくなつて更に続けた。

「それでさ、あっちのほうにもちよつと明るい星があるでしょ? あれはね、さそりの尻尾。シャウラって言つんだ。それで隣の星がレサーツ」

わたしが言い終わつて再び葵のほうを見ると、葵はいつの間にかちよつと離れた場所に立つていた。

「ねえ、わたしの話。聞いてた?」

葵は地面に落ちている小さな石を蹴つている。そしてそのままいつを見ないで言った。

「お前、本当に星が好きだな。俺にはよくわかんねえけどさ」

葵は石を地面の端っこに勢いよく蹴り飛ばして、こっちを向いた。不意に田が合つてわたしはくすくすと笑つた。

「何だよ、急に」

「何でもない」

わたしは田を逸らして返した。

「でもまあ、つまり俺はさそり座だからそのあんどうす?が俺の心臓てわけだろ?」

「…アンタレスだよ、バカ」

わたしはそやつて鹹かつてやつた。葵は恥ずかしそうにポケットに手を入れて、いいじやん、と口を尖らせた。

わたしはまた笑つた。

星だつてくつきり見える田舎の夜はちょっと闇が多すぎるけれど隣に人がいるからか、それが葵だからか、ちつとも怖くなかった。わたしたちは家の近くをくだらない話をしながら散歩した。

## 7

「アンタラスとアンタロス。どっちが正しいんだっけ」

その疑問が浮かんだのは安田に会った一日後の電車の中だった。プラネタリウムの中吊り広告を見て思い出そうとしたが記憶は既にぶれていて、あのときの安田が俺にバカと言つたことだけがはっきり残っていた。

「なあ、さそり座の心臓って何だっけ？」

俺は兎に角安田にそうメールしてまたプラネタリウムの広告に目をやつた。

「七月七日、七夕特別天の川観測」

そのプラネタリウムの場所は家から意外と近い場所だった。これを安田に見せたら絶対に行きたがるだろうな、と思いながらも俺は駅に着いた電車から流されるようにホームに降りた。

駅から学校はそう遠くはない。徒步で数分の道のり。安田はきっと寝坊でもして朝忙しいのだろう。メールの返事は来なかつた。

「…どうしても気になる」

俺がそう言つて教室を出たのは休み時間のときだつた。安田からの返事は未だになく、そのせいかずつとそのことが頭でぐるぐるしていた。

「あ、ちょっとどこ行くんだよ

友人はそう言つて教室からひょこつと顔を出したが、俺が図書室と答えると顔を引っ込めた。

休み時間の図書室には学年のトップクラスの成績の人が入る特別進学クラスの人たちがたくさんいて、標準クラスの俺たちはあまり近づかないのだ。

案の定、俺が図書室に入ると聞こえてくるのは笑い声からペンで何かを書いてる音に変わった。俺は少し驚きながらも奥のパソコンが設置してある場所へ向かつた。期末テストが近いせいか、空気はとてもつんづんとしている。俺は半ば忍び足でそろそろと歩いた。

「うわっ」

そう言つてしまつたときには頭ですぐに後悔していた。俺は不意にこけてしまつたのだ。一斉に視線は俺に向けられて俺は慌てて小さく頭を下げた。

「ふー」

やつとパソコンの前に来たときに全神経の集中が一気に途切れてしまう大きな音で息を漏らしてしまつた。またしてもやつてしまつた、と思い慌てて口をふさいだ。俺との空間は雰囲気というか波長というかが全く合つていない。

早いところ調べてでよう。

俺はパソコンの電源を入れて、検索を開始した。

しかし、思つていた以上にさそりの心臓の情報がでない。俺は目を細めてでてきた一つひとつの中を見ていくが全く別の情報しか出なかつた。パソコンは俺を笑つているかのように一刻も早くここから脱出したいと慌てる俺に関係のない情報を提示していく。

そんなこんなで俺は数分間ずっとパソコンと格闘していた。

「ねえ、君さ。ちょっと静かにしたほうがいいよ」

後ろからそんな声が聞こえてきたときにはずつと動かしていなかつた首が痛かつたけれど、図書室内で始めて聞く自分以外の声に驚いて振り返つてみた。そこには赤いふちの眼鏡をかけた女生徒が立つていた。

「え、あ。…「めんなさい」

その人は俺が言つてから、目が合つとこつと笑つた。

「君、自分では気づいてなかつたかもしけないけどパソコンの画面睨んでずっと唸つてたよ」

その人は微笑みながらさう言つと俺の隣に座つてきた。

「え？ まじで…」

俺は慌てて周囲を見渡した。幸いみんな顔色一つ変えずに勉強に集中していたがなんとなく恥ずかしくなつた。顔の温度が上がつたのは、自分でも感じる。

「わ、ウケる。君、顔真っ赤じゃん」

初対面の人には笑われた変な心境に言葉が出なかつた俺は小さく口を尖らせた。しかし、俺の目の前にいる彼女は何をそんなに調べてたのかな、と呟いて勝手にパソコンを覗いてきた。

「ん？ これ何のことだ？」

マウスを動かしながら彼女は言つた。俺とパソコンの画面の延長線に彼女の頭があつたので俺には何を見ているかがわからない。

「何つて、そそり座のこと」

「ええ？ これで、『そそり』じゃなくて『そおり』になつてるけど

？」

笑うのを堪えながら彼女はさう言つた。

「…ケアレスミスだよ」

「ケアレスミスか」

彼女に笑顔を向けられると不思議と怒る気になれなかつた俺はそう言つて何とかやり過ごした。これが安田だつたらどんなにバカにされるだろ？ か、と考えたら少し安心できた。

「ちなみにね、そそり座の心臓はアンタレスつて言つんだよ」

彼女は眼鏡を賢そうにくいつと上げてそう言つた。俺は自分の考えていたものどどつちも違つたことに少々氣落ちした。

「…今日の俺なんかダメだ…。さんきゅー」

俺はそう言つて席を立つた。やつと出られるという開放感で自然と

足取りは軽くなつた。

「あ、ちょっと……」

何故か彼女も一緒に図書室から出ってきた。

「ね、君さ。名前は？」

図書室のドアの前でそう呼び止められた。振り返つてみると結構身長が高いことに気がつく。

「え？ 名前？」

「調べ物協力したんだし、教えてくれてもいいじゃない？」

彼女はそう言つて腕を組んで歩み寄つてくる。

「まあ、いいけど。俺は一年C組の古池葵」

俺がそう答えると彼女は満足そうに笑つてからくること後ろを向いた。

「おい、待てよ。そつちの名前は？」

あまりに突然に教室へ帰つてしまいそうになつた彼女に俺はそう言った。別に意味はなかつたけど、自分だけ聞かれたままなのがなんとなく嫌だつた。

「あたしはね、森野日和。ちなみに一年A組。じゃあ、また合あうね」

森野先輩はそう言つて二年生の教室のあるほうへ走つていった。俺はただそれを見えなくなるまで眺めていた。

「それでさあ、聞いてよー！ そのひより先輩に俺ずっとタメ口聞いてたんだよね」

葵の話にその人が出てきたのはわたしがさそり座の話をした次の週からだつた。

田和先輩。頭はいいけれど特進クラスの生徒じゃなくて、身長は葵と同じくらいに高くて、髪の毛はセミロングで、いつも赤いふちの伊達眼鏡をかけていて、わたしと同じくらいの天体好きで、一年下の葵にタメ口を許していて、最近はよく学校の食堂で葵に会つた。わたしはもううんざりするほどにひより先輩の話を聞かされた。葵は、自分の話はよく人に聞かせるくせに人の話を全然聞いてくれない。

ただ、一田でわかるくらいに嬉しそうにその話をする葵は確実に恋をしているということがわかつて、なんとなく楽しかった。

葵には中学のときに三ヶ月だけ、付き合っていた彼女がいた。わたしの友達の速川麻衣子という子だ。葵はあの時も半ば強引にわたしに麻衣子の話をしていた。

「それでさ、今日もノート見せてくれたんだ。俺、居眠りしてつて聞いてる？」

電話で数分話を聞かされた後に葵が聞いてきた。

「聞いてるつてば」

「じゃあ、今何話してた？」

「麻衣子のことがすごい好きなんだ。つて言つてた」  
わたしは言つて、大きく笑つた。本当はたしか、席が近いこととノートのことを話していくたけど、確かにそう言つているようにも聞こえたような気がした。

「…まあ、要約するとそとなるか」

葵も自分で納得していた。

これがわたしの知る限り、葵の人生二度目の恋愛だった。ちなみに一度目つまり初恋の相手はわたしだ。といつても小学校の低学年か、幼稚園の頃にふざけておれたちはケツコソするんだよな、と言つてただけだけ。

とにかく、恋愛をしているときの葵はいつもよりもちょっと素直で面白いのだ。それにたくさん葵から田和先輩の話を聞いたから少

し会つてみたい気もある。

「大丈夫。天体好きに悪い子はいないよ」

わたしは葵の背中を軽く押すようにそう言った。

葵も満足そうに微笑んだ。

9

あの日以来、俺の学校生活は半分が授業、そして残り半分の殆んどが日和先輩によつて埋まつていった。日和先輩は部活に入らなかつた俺にとつての唯一の知つている先輩で、最近はよく食堂で一緒にお昼ご飯を食べる。

「ああ、そうだ。敬語やめてよ。葵君はあのときのが面白いもん」  
そう言つてくれたのもお昼ご飯を食べているときだつた。そうやつて言つてくれる度に俺は少しづつ日和先輩に心を開いていった。勉強で疲れてしまうがない学校で、友だちと笑つているよりも落ち着ける日和先輩。どことなく不思議な力を持つてゐる気がした。

まるで昔の安田みたいだ。遙か昔の記憶の、幼稚園の頃の安田だ。あのとき俺は口癖のようにはつちゃんとケッコンするんだ、と言つていた。今思つてもそのときは本当に安田のことが好きだつたのだと思う。実際に記憶の中の安田は、いつも俺に笑顔を見せてくれていた。俺はどんな時だつてそれを見たら明るくなれた。

「はつちゃん。どおしょ。先生の花瓶割つちやつた…」

そう言つた時だつて安田は笑つてくれた。

「大丈夫だよ。ちゃんと言つたら許してくれると思うよ」

案の定、先生は俺を叱りつけることなく許してくれた。きっと一人で黙つて花瓶の破片を隠していたら怒られただろう。

そうやつて安田も不思議な力を持つてゐた。当時の俺はそんな笑

顔の暖かな雰囲気の安田 はつちゃん とずっと一緒にいたかったのだろう。実際に今だつて安田といふとやつぱり落ち着ける。今はそれが恋人や配偶者ではなく、兄妹としての雰囲気だけだ。

「ひつちだよ」

昼の混雑する食堂できょろきょろと辺りを見回す俺に日和先輩が声をかけた。俺は人を搔き分けて声のするほうへ向かった。

「あれ、まだ食べてないの？」

先に席に座つて待つていた日和先輩は読んでいた本をぱたんと閉じて、一度だけ頷いた。

「じゃあ、俺が取つてくるよ  
「さんきゅー」

日和先輩は食券を渡して微笑んだ。俺はそれを見たら長い行列が苦じゃなくなる気がして、べた惚れかよ、と少し呆れた。

「おっそーい…」

やつとの思いで一人分の昼食を持つて戻ると本を読みながら俺を横目にした日和先輩が足をばたばたさせて言つた。

「せつかく取つてきてやつたのに」

「あたしはちゃんと席とつたでしょ」

日和先輩は机をバンバンと叩いた。水の入ったコップがこぼれそうになるくらいに揺れた。

この席は日和先輩のお気に入りの席だつた。学校の五階にある食堂で一番眺めがいい場所らしい。前に一度だけ俺が先に食堂に来たときに全然違う場所をとつたらすこく文句を言われた。確かによく調べてみるとここだけは街のほかに川も見えてちよつどお昼時には太陽もよく見えた。

「そう！太陽つてすごいんだよ。地球なんか全然目じゃないよ。まづね、大きさが地球の百倍以上もあるの」

その話を日和先輩にしてみると先輩はまるで辞書のようにたくさん情報教えてくれた。俺は安田と話をさせたらきっとすこいこと

になるだろうな、と思つて聞いていたがやつぱり難しかつた。

それでも日和先輩が楽しそうに話すから、それは何か別の楽しい話を聞いているような感じだつた。

10

最近、ちょっと疑問に思つるのは、わたし自身のことだつた。

葵から聞く日和先輩の話を聞いていると日和先輩はすぐ可愛くて優しいというイメージが定着してしまつた。すると、一つの疑問が浮かんできたのだ。

『もし、もしだけど日和先輩も葵のことが好きだつたら、わたしのことを一体どう思うだろうか』

ただの幼馴染は兄妹みたいなものだから、と考えるか。それとも違う学校にいつてるくせに一週間に一度会つてるのはおかしい、と考えるか。

きっと日和先輩は前者だろう。もし仮に葵と付き合つたとしても二人は仲がいいんだね、って笑いそうだ。だけど、その心のどこかは確実に傷つくような気がして少し怖い。正直、自分たちはこうして週に一度会つたつて何にも思わなくとも、第三者からみるとそれは少し違うように感じるのかもしれない。

あのときに、そうだつたように。

それは葵が麻衣子と付き合つていたときのことだつた。葵が突然わたしの家にやってきたのだ。お母さんにお使いを任せられたらしい葵は大きな箱一杯に野菜を持ってきてくれた。

「これ、うちのじいちゃんがお前ん家にあげろつて送つてきたんだ」「あ、わたしこの葵のおじいちゃんのトマトすごい好きなんだよ」

そのとき、まだ何も知らなかつたわたしはついそこで話し込んでしまつた。後から聞いた話によると、ちょうどわたしたちが話し込んでいるときに葵の家に麻衣子が遊びに来て、葵のお母さんからあたしの家に行つたことを聞いてしまつたらしい。もちろん、葵のお母さんに悪気はない。わたしの家に来ることは別に何でもないスーパーに買い物に行くのと同じようなことだからだ。しかしきつとそのときの麻衣子には、なかなか帰つてこない葵に裏切られてしまつた気がしたのだろう。結局、葵が帰つてくる前に麻衣子は帰つてしまつたらしい。

わたしはそれを聞かされてからひどい罪悪感を感じた。友だちと幼馴染。同時に一人を傷つけてしまつたのだ。結局、それがあつた以来あまり二人の中はうまくいったと思えないまま自然消滅してしまつた。その後にわたしは麻衣子と葵の両方に謝つた。一人とも笑つて許してくれはしたけど、きっと傷を隠しているんだろうな、と思つたら心の痛みは取れなかつた。

それがあつてから今まで卑怯だと思いつつも恋愛のことがでてもそのことにはあまり触れないできた。だけど、今回ここまで本気で恋をしている葵の姿を見ていたら今のわたしは正しいのだろうか、と疑問に思えてきた。

幼馴染だから、で済む問題ではないよつた気がする。やつぱりどこかでわたしの存在は一人に傷をつけてしまう。  
こういうとき、幼馴染は辛い。だけどこのまま触れないでいるひとつと邪魔することしかできないだろう。  
だつたらいつそ、わたしは…。

「もうやめ、余りのはやめにしよう?」

何があつたか、よくわからない。最近は日和先輩のことばかりだつた俺のはずなのにそのメールが安田から来たときに一瞬だけ頭が真っ白になつた。たつた一行のメールにこれまでに感情を左右されるとは思わなかつた。

「どうした?」

俺は慌てて送り返そうとさう打ち込んだ。しかし、送信しようとしました瞬間にふと、速川麻衣子の影がちらついた。

あのときは確か俺が安田の家に行つて…。

「あれは俺が悪かったから、大丈夫」

謝られたときにそう言つた。それに速川だつてちゃんと納得してくれたはず。なのに、きっと安田はずつと心でそのことを考えていてんだ。自分のせいだと勝手にせめてたんだ。そして、きっと俺が最近日和先輩のことを話すようになつたから自分はまた弊害になるもんか、と直覺したことを見つけてきたのだ。

幼馴染の考えを読む」とへり、「簡単だつた。

「もうやめ、余りのはやめにしよう?」

正直、それを送つたときにわたしは少し泣いていた。幼馴染で学校が別々になつても会いに来てくれた葵。そんな優しい葵を葵のためとはいえ自ら突き放すのはすごく辛かつた。だけど、これで葵は一男子として日和先輩に恋ができる。葵だつてきっとそれを望んでいはづだ。わたしはいないほうがいい。

幼馴染の考えを読むことくらい、簡単だった。

### 13

「ねえ、葵君…。最近なんか元気がなさそう」

日和先輩が俺にそう言つたのは、安田からメールがきた数日後のことだつた。この数日あまり笑つたという記憶がない。だからもちろん日和先輩が俺の笑つた顔を見てもない。前までは楽しかつた天体の話も、安田をちらちらと思い出させて笑えなくなつていた。

それに最近は正直、食欲もあまりない。自分がまさか安田の一言でこんな風になつてしまつとは思つてもみなかつた。確かに、安田といふときは安心できて、心から笑えて、暖かくなれた。だけど俺はそれが家族みたいなものだと思い込んでいた。本当の気持ちに気づいたときにはもう遅かつた。俺は、本当にバカだと思つ。

日和先輩に元気がない、と言われた日の放課後。先輩は珍しく俺の教室に顔をだした。

「おい、あの先輩つていつもお前と食堂にいる…お前、付き合つてるの？」

友だちにそんなことを言われても、なんだか心は乾いていく一方だつた。俺は答えないまま日和先輩が待つてゐる廊下にてた。先輩はいつになく真剣な顔つきだつた。

「葵君。わたし好きな人ができた」

そう聞いたのはその後に一人で学校の屋上に行つたときだつた。俺は腕を引つ張られてここまで連れてこられた。本当は立ち入り禁止の人気のない屋上は風の通り道になつていて日和先輩の髪も風と踊るように揺れていた。

「好きな人って誰？」

俺は風に負けないように大きな声で聞く。

「好きな人ね。君だよ、古池葵君」

真っ赤だけど真剣な顔の日和先輩の口からでたその言葉は、屋上に立っている俺の足元を崩すかのように感じられた。

それから、俺は日和先輩の本当の気持ちを出会ったときに振り返つて細かく聞いた。

風が吹いていなかつたらきつと体温はものすごく上昇したと思つくりに火照った顔で日和先輩は細かく答えてくれた。

全部聞いた後には心は砂漠のように更にからからになつていた。

そして、全ての覚悟を決めた俺は、言った。

七月六日。暑い夏の始まりに俺は…。

14

あたしが、その子に出会ったのは図書室だった。特進クラスの子が真剣に勉強する中、一人だけ大きい声でこけたり、パソコンを睨んだり。最初はおかしな人だなと思っていただけだったけど、ちらちらと見ていくうちになんだか面白くなつて、遂にはあたしから話しかけてしまつた。思えば、そのときからあたしは葵君のことが気になつっていた。

距離置かれたくないなつて気持ちがあつたから、あたしは先輩なのにタメ口で話して、と言つた。あたしのことよく知つてもらいたかつたからいろんなことを話してあげた。

「この眼鏡、実は頭よく見せるための伊達なんだ」

「あたしね、食堂のこここの席が一番好き」

「いい? 天体つて言つのはね、まだまだ未知の世界。だけど、だか

ら」やのす」をつてあると思うんだ。だから好き」

「そ、葵君にはたくさん、たくさん話をしたんだ。

「好きな人ね。君だよ、古池葵君」

あたしは葵君に嘘をついたことがない。眼鏡のことも、食堂のこと、天体のことも、葵君のことも全部が本当のあたし。正直、これほどそのままのあたしを人に見せたことなんてあまりなかった。

風が舞う屋上で頬を赤くしたあたしはそんなあたしの全てを葵君に話した。正直、葵君がそんな気持ちに答えてくれないだろう、ってわかつてはいながらも、元気のない葵君を見ているとこのままあたしから離れていつちゃうんじやないかと無闇に焦つて、遂に決意を固めた。

「ひよりん。頑張つてね」

クラスの友だちの後押しもあって、決断してからのあたしの行動は早かつた。すぐに葵君のいる1年C組に行って葵君を呼び出した。

「どうしたの？」

そう言つた葵君の腕を引っ張つて屋上まで連れて行った。立ち入り禁止のロープは、田に入らなかつた。

これからどうなろうと、言わなくちゃいけないと屋上へ続くドアを勢いよく開けた。

空。風。街。太陽と腕から伝わる葵君の体温。

それが一瞬であたし全部を支配して、だからそれ以降は勝手に口が動いていたかもしれない。

「好きな人ね。君だよ、古池葵君」

覚えてはいるけれど、覚えていない。兎に角混乱に似た何かがあたしを動かしていた。だけど、それがあたしの全てだったから、構わなかつた。

やがてあたしが葵君に全てを話し終えると、遂に葵君は口を開いた。

人生で一番緊張したのは紛れもなく、この瞬間だった。

七月六日。暑い夏の始まりにあたしは…。

15

衝撃が走ったのはそのときの葵と一緒に感情だつただろう。

「今日、日和先輩に告白された」

そうメールが来たとき、わたしはもう動けなくなっていた。  
これが葵が望んだこと。わたしはただ影で喜べばいいんだ。わたしはただの幼馴染なんだから。そう考えられたのはそれから半日後の夜中だった。

メールのきた夕方頃からそれまで、殆んどわたしは何もすることができなかつた。ただ、涙が流れるとやつとこれでいいんだ、と考えることができた。

「よかつたじやん」

携帯電話にそう打ち込むも、クリアを押してしまう。そんなことをしてると、自分の気持ちに気づくのにそう時間はかからなかつた。  
中学のとき。葵が麻衣子と付き合つことになつた日。封印したあの気持ちを、わたしはまた取り戻した。

するともうわたしの身体は勝手に動いて、気がつけば家を飛び出していた。

なんで、いうなるまで忘れたままでいたんだひつ。わたしの正直な気持ちは、葵によかつたね、と言えないんだ。もう、手遅れかもしれないけれど、遠い遠い記憶のわたしたちのようにお互に好きと言える一人になりたいんだ。わたしは本当にバカだ。

息が切れるまで懸命に走ると不意に田から涙が零れ落ちた。わたし

しは立ち止まつてそれを拭つた。肩で大きく息をしても心臓は色々なことでもう限界だと思うほどに鼓動が早くなつていった。仕方なくわたしはふらふらと歩きだす。

とにかく葵に会いたいという気持ちだけで一步ずつ前に進んだ。

「」いちへ向かつてくる一人の人影が見えたのはそらから数分後のことだつた。息は已然として落ち着く様子を見せない。わたしは噎せながらも大きな声で言つ。

「葵……！」

そう、そこにいるのは間違ひなく葵だつた。葵もまた走つてきたらしく肩で大きく息をしている。

「でかい声……だすなよ。近所迷惑だぞ？」

一生懸命息を吸つて葵は言つたけど、わたしはそれに続く言葉がうまく見付けられなかつた。

お互いになぜここにいるんだろう、と考えながらも時間は静かに流れしていく。

やがて息も整うと、葵は電柱にもたれかかつた。

「あのさ、メールの返事返つてこなくて……、心配になつてさ……」

「心配つて……？」

葵の目を直視できないわたしは電柱の逆側にもたれかかつて、聞き返した。

「勘違いしてるかなつて……。俺さ、日和先輩の告白、断つたんだ

「……え？」

「俺には好きな人ができるんで、ごめんなさいって

電柱を挟んでわたしの後ろにいる葵の表情がすごく気になつた。だけどもし悲しい顔をしてたら、と思うとなかなか身体は動いてくれなかつた。

「好きな人つて？」

わたしは逃したら次はないと考えて、兎に角聞いた。もしかしたらそのときわたしは葵を信じてたから聞けたのかもしれない。

「葉摘。…幼馴染の安田葉摘」

その名前がでたときには身体は動かないどころか、今度は勝手に動いて葵の前に立っていた。身長の高い葵を見上げて言つ。

「ありがとう。わたしも好きだよ」

しばらく笑いあつた後、わたしたちは久しぶりに手を繋いで歩いた。また何でもない会話をして、心地よい葵の暖かさを感じて。

「そうだ。明日さ、一緒にここに行こう」

葵はわたしを家に送り届けたときに玄関でポケットから一枚のチラシを取り出した。

「プラネタリウム。七夕特別天の川観測…。うん、いいね。行こうか」

わたしは指切りをしてから、葵を見送った。

一人の玄関でチラシを手に笑顔は消えることがなかつた。

七月六日。暑い夏の始まりにわたしは…。

16

「あーおーいー。遅れちゃうよー」

七夕の七月七日。俺は今日もまた、その声で目が覚めた。昔と違つるのは勝手に部屋に入つてきて、俺の身体をゆさゆさと揺らす葉摘。

「うー…」

寝ぼけ眼に葉摘の笑顔。

なんでもない一日が幕を開ける。

飲み込もうにも溜め息はもうでなかつた。

T  
H  
E  
H  
A  
P  
P  
Y  
E  
N  
D  
\*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3934b/>

プラネタリウム～懐かしい匂い、風の心～

2010年12月11日00時47分発行